

---

# その言葉を待っていた

蜃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その言葉を待っていた

### 【Zコード】

Z3571T

### 【作者名】

蜃

### 【あらすじ】

嫁に行き遅れた子爵令嬢ファンティースは周囲のあてこすりから逃れるためにこつそり宮殿の掃除婦をしていた。けれど、なぜか第二王子のエヴラールはそんな彼女に良く声を掛けてくれる。ある日気になつて理由を訊ねると、返ってきた答えは驚くべきものだった。王宮を舞台にした軽いラブコメ話です。

まだ新入りのメイドを見て、私は言った。

「ねえ、まだそこ終わってないよ？」

そういうと、新入りはあからさまに嫌そうな顔をして「すみません」と言つて、掃除をはじめる。私はゆううつな思いでため息をついた。こういうとき、びしつと怒れない自分が嫌だ。

「」は宮殿、現在では宮廷として使われているので、王侯貴族の方々がたくさん出入りしている。私も一応は貴族出身なのだけど、「」で「」して掃除をして暮らしている。

私はファンティース。年は一十七歳。  
まあようするに、行き遅れの年増女だ。  
全体的に私の容姿は地味そのもの。

着飾れば見られる姿にはなるものの、金髪なのに茶色みが強すぎていたり、青い瞳なのに色が濃すぎてそう見えなかつたり、惜しい要素満載でいたらいつの間にか社交界では壁の花。気づいたら社交の場にいくこと自体が面倒くさくなってしまつてしまつていた。

「まあいいけどね」

私は鼻歌を歌いながらほつきを動かす。

実家に残つっていても良かつたが、売れ残つてしまつた娘としては、おばや、時々遊びに来る知り合いの視線が痛い。なんで二十代で行

き遅れ認定されなきやならないのかしら。まだ子どもだって産めるのにと思いながら過ごす苦痛に耐えきれず、私は実家のコネを使い、富殿の雑用仕事をもらつたのだ。

一人はきまで氣楽だ。状況が許してくれるのならば、年をとつて動けなくなるまでこうして置いてもらつつもりだつた。

今日は晴れて氣持ちいいし、休憩時間になつたらお庭の薔薇やその他の花木を見ながら、庭師のおじさんと雑談でもしようかしら。

そう思つていると、誰かが歩いてきた。

いま私が掃除している場所は中庭をとりまく回廊だ。私は歩いてきた人物の服装をさつと見て、身分の高い人物だと察し、すぐにわきによける。だが、その人物は立ち去らずに私の前に立つた。

ああ、またきたのか。

「ああ良かつた見つかって、探してたんだよ  
「何か御用でしょうか？」

他に自分が声をかけられる要素も見つからないので私はそう言った。けれど、顔をあげて目の前の人物を見ると、つい苦々しい思いでなんとか普通の顔を保つのに苦労する。

それは現在ここに滞在している王族のひとり、第一王子のエヴァーリル殿下だ。

金糸を集めて植え付けたようなサラサラの透明感がある金の髪に、私が欲しかった明るいブルーの瞳をした、ハンサムで明るい、そして

てプレイボーイとして名高い青年である。確か年は一十四歳。年の若いメイドたちが一日に一度は話題にしている。

まあ、もういい年になってしまった私には関係ないのだが、どういう訳か、ここに滞在するようになつてからとこつもの、彼は時折声私にをかけて下さるようになつたのだ。

「御用も何もないよ、ただ話をしようかなと思つて

「今日は何を？」

「君の」と。もつと教えてよ

チャーミングな笑顔で言いながら、私からほつきを取り上げようと手を伸ばしてくる。私はほつきの柄をぎゅっと抱き込んで、必死に笑顔を浮かべた。

「も、申し訳ありませんが、今は仕事中ですでの

「いいじゃない、僕がいって言えば平氣だよ

「いいえ、後でメイド長に怒られたくないんです。他のメイドに白い目で見られたくないんです！」

私は黙つて、ますますほつきを体に押し付け、後ずさない。

すると、彼の青い目がやや暗い色をおびて翳つた。

「ひらひらましいなあそのほつき、へし折つてやりたい

「何ですか？ どうしたたらそういう結論になるんです？ これは

宮殿の大切な備品ですよ、職人が魂込めた逸品なのに、へし折るだなんてとんでもない

「やつ？ ジャあおとなしくそれを適当な場所に置いて、話をしよ

うよ

だめか。相手は王族、逆らひなんて無理な話だつた。私は素直に言つことを聞き、ほづきを手近な茂みに隠すと、H'ヴラール殿下に向かい合つた。

「それでいい。さて、何の話をしようか?」

につひとつと天使、いや悪魔のほほえみを浮かべた殿下は、私の手をとり、庭の方へと歩き出す。私は困惑しつつ、ふと思いつて訊ねた。

「あの、どうして私などにかまわれるんですか? もつと若くて可愛い使用人もおりますし、殿下ならどのような貴族の姫だつてよりどりみどりじやあありませんか?」

「そんなことないよ」

「そんなことがありますよ。その……失礼なことを申し上げますけれど、殿下には、意中の方などはいらっしゃらないんですね?」

H'ヴラール殿下は立ち止まつた。私はまずいことを聞いたかしら。全身の血液が冷たくなるのを感じる。口を縫いつけてやりたい。

「なんで、そんなこと聞くの?」

「え、と……私てつきりそういう相談を持ちかけられるのかなと思つて。それに、殿下に恋人がおられれば、殿下を慕つて涙を流す乙女の数もぐつと減るでしょうし……」

私は混乱して、ますます変なことを口走る。やはり、この口はだめだ。

「ああ、すみませんすみません！ 今言ひたことすべて忘れてください！」

私は思わずそう呟いた。とにかく恥ずかしい、顔から火が出るとほれまいにこのことだ。

「それは、君もやつこつこの女のひとりだつてこと？」「は……え？」

だが、Hガーラル殿下から返つてきたのは意外な答えだった。私はビック反応して良いやら固まる。もちろん答えはノロだ。

そもそも、年下の男性とビックなほど考えたこともない。世間的にも、それはおかしいこととされている。まあ、例外はあるが、一般的にはそうだ。その規範からはずれようと、おこがましいことは考えないよつこにしてくる。

「だつたら」めん、ずっと、君は僕なんか眼中にないと思つていたから

そういうなり、殿下の手が伸びてきて、私の腰におさまる。そのまま強く抱きしめられた。乗馬が趣味の殿下の体格はかなりがつしりしており、力も強い。逆らつことなど出来ない。いや、逆らつといつ考え自体が浮かんでこなかつた。

家族を除いて、男性に抱きしめられるなどといふ経験はない。人生初だ。そのまま凍りついたよつこじつとしているが、少しだけ体が離れて、顔が近づいてくる。

きれいな顔。なんてうらやましい……私はほんやりとそう想つ。

やがて、唇が重なった。

頭が真っ白になっていた私は、何が起こったかすらわからない。やわらかく、甘いくちづけ。じらすように、唇をゆっくりと舌でなぞり、少しづつ口を開けさせて、さらに深い口づけをする。

息、息が出来ない。うめいて、彼に強くしがみつく。酸素が足りない、けれど、彼は中々離してくれなかつた。頭にもやがかかつたように意識が飛びかけたところで、ようやく唇が離れる。

「……っは、何を」

必死で酸素を補給しながら、私は問つた。

「つづきは、ちゃんとこれからだね」

しかし、殿下は訳のわからない答えを返して、満足そうに笑うばかり。

「ま、待つて下さい、意味、意味がわからない…………です  
「今のでわからなかつたの？ 僕の意中の人……」

甘いほほえみが目の前いっぱいに広がつている。  
そこまで言われば、さすがの私でもわかつた。  
けれど、同時に疑問もわく。

どうして？ どうして私なの？

目が雄弁に心の中を語つてしまつていたらしい。  
彼は、まだ息があがつたまま、微かに笑いながら言つ。

「以前にね、」ヒジなくて他の宮殿で舞踏会が開かれたときに、僕は君と会ったことがあるんだよ。君は、女性に囲まれていた僕を見て、体調が悪いのに気づいてくれただろう？

「え、と……そういうえば」

私は忘れようとしていた記憶の糸をたぐる。

確かに、美しい女性に囲まれて顔を青くしていた若者がいたことを思い出す。氣の毒に思い、声をかけてそこからひっぱりだして、夜氣に当たしてあげたのだ。

「そのとき、ちょっとお説教されてね。そんなふうじゃ、いつか本命に出会ひても本氣を理解してもらえないわよ、と言わたんだ。すぐにはわからなかつたけど、この年になつてようやく理解できた

ヒヅラール殿は、懐かしむよつて、愛おしこ思つてを味わつよつて語る。

私は黙つて話を聞く。  
頭上を、渡り鳥が爽やかな声を上げながら飛び去つていく音がした。

「それから、ずっと君を探していたのに、どこにもいない。パーティというパーティにはなるべく顔をだしたのにいない。そして、この冬にここに宮廷が移つたら、使用人にもぎれているじゃないか。びっくりしたよまったく……それからというもの、暇を作つては会いにきてくるといふのと、君は何にも気づかないし」

恨みがましい田で言われ、私はうなだれる。

それは悪いことをした。なにしろ、昔の記憶は私にとつて苦々しいものばかり。

遠く遠くへ、宇宙の果てまですつ飛ばして、そのまま砕け散つて戻つて来なければいいとすら思つていたのだ。思い出すそばから、お酒や思考停止という技を使って忘れようと努力まで重ねたのである。そう簡単に思い出すはずがない。

けれど今、ちゃんと想い出した。そのときこの若者は素適な男性になるだろうな、と思つたことも一緒に思い出す。

ほんのかすかな憧れを抱いたことまでも。

彼の兄である第一王子も女性に人気だが、彼はどこかきびしい、恐れを抱かせる人物だつた。だからだろうか、私の視線は吸い寄せられるようにエヴラール殿下に向いてしまつっていた。もちろん、王族に恋心など抱いても空しいだけでしかないから、その小さな憧れは胸に秘めるだけで終わり、以来、恋らしい恋もせずここまで来てしまつた。

「でも、いひしてやつと余えた。そして、本当の気持ちを言える…。僕は、ずっと君を探していた。君が欲しい、結婚しよつ」

そつと、少し節くれだつた手が頬を撫でる。体が震えた。甘いしひれが全身を走る。

私は答えた。

「無理です

エヴラール殿下の顔が悲しげに曇る。そのつらそうな顔に、胸が痛んだ。

「どうして？ 僕は君を愛してる、君も僕を好きでいてくれた。君の身分は貴族だ、何も障害はないじゃないか、無理などないよ」「そもそも、私はまだひとつも殿下を好きとは言つてません」

沈黙。しばらくして、Hヴーラル殿下の顔色が変わる。

「待つてくれ、でもわざと君は逃げなかつたし否定しなかつたじゃないか！」

「やうですね。女性が男性に捕まえられた場合、まず逃げられませんし、否定するほど殿下が嫌いだというわけじゃありませんし」「じゃあ、嫌なのかい？」

苦しげな顔をして、聞いてくる。

私は、きらんと言わなきや、と氣を引き締めた。  
彼のためにも……言わなくてはならないのだ。

「私には、王族の中で暮らすだけの強さがありません。それに、殿下は非常におモテになります。私はきっと、いつか耐えきれなくなると思つたのです……ですから、無理なんです。こんな身勝手な私などさつさとされて、他の方をお探しになつてください」

わっぱつと泣き声。

私は気づいていた。逃げもせず、拒みもしなかつたのは、ずっと彼を密かに思つていたのだと。自分の思いを箱に閉じ込めてふたをして、なかつたことにしていたのだ。

自分が、苦しみたくなかったから。

「こんな卑怯で弱い女と結婚させてはいけない。だから、私は言った。痛くてたまらなかつたけれど、言わなければと思つたから言った。」

が、殿下はすつ、と表情を消し、低い声で唸るよつに言つた。

「嫌だ」

「えつ？」

「嫌だつて言つたんだ！」

私は啞然として殿下を見つめた。

「君といられないなら、王族なんかやめてやる。それならいいだろ！」

「ま、待つて下さい、待つて下さい！ 正氣ですか？」

「ようするに繼承権を捨てればいいんだ。大丈夫、僕はただの官僚としても有能だから！」

それは知つている。

外交手腕に優れたエヴラール殿下のおかげで、何度も戦争を回避しているのだ。その度になんてすごいお方だと一人でお茶を飲みながらクツキーをつまみ、ほくほくしていたのだから。

「だめですよ！ 何でこんな女のためにそこまでするんですか！」  
「僕の好きな人をこんな扱いするな！ いいから手を放してくれ、父上と兄上に宣言してくる」

「ああー、わかりましたよ、結婚すればいいんでしょう？ お願

いですから辞めて下せよ…」

思わず私は叫んでいた。

ぴたり、と殿下の動きが止まる。

しまったと思つたときには遅かった。私は、生涯自分の口に後悔しながら生きていかなくてはならないようだ。心の底から、口の軽い自分を呪う。

ゆつくつと振り返つた殿下は、真摯な眼差しをしていた。

「本當? じゃあ結婚してくれるんだ?」

「はい。そこまで言われたらもう断れないじゃありませんか……後悔しても知りませんよ? 後でこんなダメ女と結婚した自分を呪つても取り返しきませんからね。辞めておくなら今ですよ?」

「そんなこと言ひ訳ないだり? 嬉しいよ、今日は最高の日だ!」

殿下は明るい笑顔で私を抱き上げ、そのままぐるぐると回した。

私は目が回りてしまつ。殿下も同じく目を回したらしく、そのままふたりそろつて花生の上に倒れ込む。殿下の上に乗つた形となつた私は、彼の両手が妙な動きをしているのに気づいて、小さく悲鳴をあげた。

「ちよつ、何してるんです?」

「ずっと触つてみたいなと思つてたんだ。ファンつてや、結構いい身体してゐよね、結婚したら楽しみだなあつて実は考えてた

邪までりながら、明るく屈託のない笑み。もちろん、その行為自体についての知識はある。ふと、ヒュラーレル殿下の年齢に思いを

はせ、思つ。初夜は、私の身体が持たないかもしぬこと。

「知つてこむと思ひますけど、」少しこいつときは清楚じやないから、美しくないつて言われているんですよ」

呆れたようになり私。それでも、自分の身体が彼にそういう影響を『えられるのだとと思うと、少しわくわくした。そつ、と上体だけ起こして、憧れの人の口もとを見る。

触れたい、と思つた。

「そんなことないのに」

「そつだといいんですけど……私、努力しますね。私なんかを選んでしまつたせいで、殿下の顔が曇つていたとか言われるのは、嫌ですから」

「私なんかとか言わないでよ、僕はさつきからずっと君がいって言つてゐるのにさ」

言つて彼はちよつと怒つたような顔をする。  
するいことに、どんな顔も魅力的だ。  
私は、そつと顔を近づける。  
唇が重なる。

先ほどの強引なものと違つ、静かな口づけ。  
少しして、すぐに離れると、殿下は嬉しそうに笑つた。

私は口を開いた。

ちゃんと、心を言葉に変えて伝えなければ。

「先ほどのそつをついて申し訳ありません。私も、殿下が好きです

……ずっと、愛していました

「……その言葉を待つてたよー。」

殿下はやう答えて、私を引き寄せると、強く抱きしめた。

それは、優しく穏やかな初夏の午後の話。

庭園で転がっていたふたりの笑い声を聞いたものたちが、驚いて探しにいったものの、そこにはすでに誰もおらず、小さな茂みからホウキの柄が飛び出している光景を見ただけだった。

それから三ヶ月のうちに、第一王子エヴラールと、子爵令嬢ファンティースの婚礼が、厳かに執り行われ、しばらくのあいだ、国は幸せな雰囲気に包まれることとなつたのだった。

（終）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3571t/>

---

その言葉を待っていた

2011年9月20日17時54分発行